

氏名 近藤 明日子

本論文は明治・大正期の日本語の書記言語（書き言葉）における一人称代名詞の実態と通時的変化について、同時期の日本語資料、特に雑誌の大規模コーパスを構築・利用することを通じて検討したものである。全体は13章から構成されている。

第1章では従来の当該時期の日本語一人称代名詞の研究が小説・戯曲などの会話文によって行われており、書記言語における一人称代名詞の研究は進んでいないことを指摘する。

第2章では使用した近代雑誌コーパス（『明六雑誌』など7点）の設計と構築の実際を説明し、第3章ではそれらのコーパスから個々の用例を抽出した方法を示す。

第4章では使用したコーパスの規模が文章の数7226編、著者数延べ2158人、全体の語数（延べ語数）1272万語であり、非文芸的な文章の多いことを示す。

第5章では『明六雑誌』において、一人称単数の代名詞としては「余」が最も多く、同複数の代名詞としては「我」や「吾人」が多く用いられることを述べる。

第6章では『東洋学芸雑誌』において、一人称単数の代名詞が「余」、複数の代名詞が「吾人」に集約されていることを述べる。

第7章では『国民之友』において、文章の署名の有無により一人称代名詞が異なり、前者では単数の「吾人」が多く、後者では単数が「余」、複数が「吾人」であることを示す。

第8章では『太陽』の文語体の文章に用いられる一人称代名詞を検討し、単数は「余」「吾人」、複数では「吾人」「我」が多いことなどを指摘する。

第9章では文語体文章における一人称代名詞の変遷について分析し、単数では「吾人」が増加し、複数では「我等」が増加するものの、「吾人」も多数使用されたことを示す。

第10章では『太陽』の口語体の文章に用いられる一人称代名詞を検討し、単数は「私」、複数では「我々」が多いことを示し、第11章では同誌の口語体会話文の一人称代名詞を検討して男性では「僕」や「俺」、女性では「私」が多いことを述べる。

第12章では女性雑誌3種の一人称代名詞について検討し、文語体では女性筆者が単数「我」、複数「我等」を多く用いることなどを述べる。

第13章では本論文が従来の研究がなし得なかった分析に成功したことを主張する。

本論文は、明治・大正期の書記言語における一人称代名詞の実態を大規模コーパスの利用により初めて精密に分析したものである。一人称代名詞の通時的変遷の原因について、なお検討が必要な面はあるものの、近代日本語の人称代名詞の研究を大きく進めたものとして高く評価できる。この理由から本審査委員会は全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。